

してにししろる
願い勇者だるこつて
おついたいしてどつて
問TSしない戻つて
サマに切をらてTSなき戻つて
人種を裏第をらてTSなき戻つて
事の次第をらてTSなき戻つて
にいつたえが巻TSなき戻つて
何も憶えが巻TSなき戻つて
か時間が巻TSなき戻つて
覇王だがチエ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類に魔法という恩恵と、魔物という脅威を与えた魔神。

魔神を打ち倒し、人の世を勝ち取るために彼らは立ち上がった。

『勇者』、『聖女』、『賢者』、『破天』、『霹靂』、『波濤』、『光速』、『百獸』、『金剛』、『自在』。
人呼んで十傑。万夫不当の英雄達が、魔神打倒のため手を組み、魔神が作りしダン
ジョンへ挑んだ。

ダンジョンを進む内に、一人、また一人と英雄達は櫛の歯が欠けるように散つてゆく。
いざ魔神へ挑む段になり、残っているのは『勇者』、『聖女』、『自在』の三人のみであつ
た。

しかし、魔神を前にして『自在』は『勇者』の凶刃に斃れ、『勇者』と『聖女』も魔神になす術なく散つた。

『自在』は死後、ギシンを名乗る神に出会い、願つた。
『勇者』の真意を問いたい、と。

そしたらもうなんかしつちやめつちやかになつてた。

目次

力ミとの遭遇	1
実際豊満だつた	11
新たな魔法	16
二度目の死	25
ギシンとの再会	29
ギシン問答	35
神殺しの器	41
初めての神器	46
決意の夜	53
二度目の部隊実習	60
二度目の初対面	65
また俺なんかやつちやいました？	

完璧な計画

74

80

カミとの遭遇

俺は前を行く二人に気付かれないようそつと振り向き、口の中で呟いた。たつた三人かよ、と。

「どうかしたか？」

どうやら振り向いたまま、足を止めてしまつていたらしい。後ろからの足音が止まつた事に、『勇者』——光属性剣士でただ一人、昇格クラスアップに成功した男、勇上ゆうがみ聖は耳ざとく気が付いたのだろう。

「いや……誰か追いついて来てねえか見ただけさ」

胸中によぎつた弱音をそのまま口に出すか悩んだのは一瞬だつた。今更取り繕つたところで、何も変わりやしない。

「……そうか。彼らが時間を稼いでいるうちに、今は先へ進もう」

「分かつてゐるさ……分かつてる」

ここに入つた時、俺達は十人だつた。それが今はたつたの三人だ。俺達を先に進ませるために、足止めに残つた七人は今頃……。

「急ぐ」

感情を持たない傀儡のくぐつような声だつた。物言わぬ骸が喋つたかのような違和感。この女の声を聞いたのはいつぶりだ……？ 巷では『聖女』と呼ばれている、光属性魔法使いで唯一の昇格^{クラスアップ}に成功した女、椎堂^{しどう} 真理亞^{まりあ}は先程までのやりとりにまるで興味がないかのように端的に喋つた。

「ああ……」

冷や水を浴びせられた気分になつた。前を行く二人に続いて足を動かしながら思い出す。思えば今までこの女が喋るたびに背筋が凍る思いをしている。人間味を感じない程の美貌がそう感じさせるのか、俺が反対属性の魔法使いだからか。整つた顔と金糸のごとき髪をヴエールとフードで隠し、女性らしい肢体はだぼついたローブに隠されシリエットすら分からない。ヴエール越しに見える椎堂の顔は能面のようになつてゐる。そのままだ。その一方で、勇上は余裕があるかのようにいつも通りの笑顔を張り付けている。憎たらしいほどにいつも通り、とはいからず、緊張か疲労からかその額には汗が浮き出て、黒い前髪が張り付いている。無理もない。今の今まで最前線で剣を振り続けていたのだ。仲間達が一緒にいた、つい先程まで。

この思考が現実逃避なのは俺が一番分かつていてる。しかし現実を直視できない。したくない。仲間の命を犠牲にしてまで成し遂げねばならないのか、とか、何か他に手立てがあつたのでは、とか、後ろ向きの事しか出てこず、顔はうつむき足が自然と止まる

からだ。

「……つと、わりい、なんかあった——か？」

考え事をしたまま進んでいたので、前を行く勇上が止まつた事に気付かずぶつかつてしまつた。そして、顔を上げて、勇上が足を止めた理由が目に入つた。

扉だ。とても大きな扉が石造りの通路の先にあつた。高さから推測するに、身長十メートル以上の存在が利用するために作られた扉のように思える。扉は完全に閉まつておらず、人一人が入れるだけの隙間が空いていて、そこからは冷気のようなもやと青白い光がこちらに漏れ出ている。濃密な魔力の気配……これまでに感じた事がない程の魔力を扉の先から感じる。

「……魔神はこの先だ。椎堂、かみのき神之木、準備はいいか？」

椎堂は首肯で返した。俺はありつたけの支援魔法で返答とした。物理的な攻撃を一度だけ防ぐ魔法、魔法的な攻撃を跳ね返す魔法、致命的な攻撃を魔力で肩代わりする魔法、弱体魔法の効果を減衰する魔法、相手の魔法抵抗を貫通する魔法。物理的に与えるダメージが増える魔法等……魔神相手にどれだけ通用するかは分からぬが、気休めにはなるだろう。闇属性魔法使いの本領発揮だ。後は戦闘中の弱体魔法と支援魔法を切らさないが俺の仕事だ。

攻撃は勇士、回復は椎堂、支援は俺とバランスは取れている。なんとかなるはず……

いや、なんとかするしかない。俺達に残された道は扉の先にしかないのだから。

勇上が先陣を切り、扉の隙間から中に入つた。椎堂と俺もそれに続く。

扉の先は、一つの部屋だつた。中央に巨大な球体が浮遊している。部屋に充満する魔力は、その球体から発せられているようだ。あの球体が、魔神なのか……？ 俺達が部屋に入つてもなんの変化も見せない球体は、ただゆっくりと浮遊し回転しているように見える。

「……どうする、勇上。先制攻撃できそうだが……？」

「その必要はない」

勇上は懐から短剣を取り出した。背に吊るした聖剣があるにも関わらず、そんなちやちな短剣で何をするつもりだ？ それに、必要がないとはどういう――

「これで終わりにする」

勇上は短剣を頭上にかざした。すると、これまで変化を見せなかつた球体にひびが入り、そのひびから青白い光が噴出した。勇上の攻撃動作に反応したのか？ 俺は弱体魔法をいつでも発動できるよう身構えた。ここからは勇上の行動と魔神の動きに合わせて最適な支援魔法と弱体魔法を発動する必要がある。まずは勇上に視線を向けて、それから勇上の……勇上？

「――あ、え？」

勇上は魔神に背を向けて、こちらを向いていた。いや、こちらに短剣を振りかざしていたと言うべきか、振り下ろしていたと言うべきか。魔神に気を取られていた俺は、その短剣が俺の胸に突き立つ瞬間をなす術なく見てている事しかできなかつた。

俺の支援魔法を軽々と貫通したその短剣は、ただのちやちな短剣ではなかつたのだろう。聖剣と同じく、魔法抵抗を貫通——いや、それ以上か。俺の支援魔法をものともしなかつたという事は、魔法的な防御を無効化する短剣だ。魔神相手にはなんと心強い武器だらうか。きっと、その短剣を敵に振るうには、仲間の命を吸わなければならなかつたのだろう。そうだよな勇上？ 信じていいんだよな？ 言つてくれれば魔神を倒すために俺の命を捧げるくらいどうつて事は——

「ゆう……がみ……？」

なんだつてそんな目で俺を見る？ それが仲間に向ける目か？ これから出荷される家畜だつてそんな目で見ないだろ？ なあ勇上——

「これで は 、 にして 、 」

ひびが入つた球体に話しかける勇上。耳が遠い。何を言つてゐのか頭に入つてこない。視界もぼやけてきた。きっと魔神を相手に勝利を確信し、言い残す事はないか、なんて慢心しているんだろう。お前らしくないぞ勇上。そんな口上はいいからさつさと魔神に攻撃を——

球体のひびが大きくなり、そのすきまから出たしょくしゅがゆうがみとしどうをつらぬいた。ほら見たことか。おれがいなかつたらどうするつもりだつたんだ？　ぶつりぼうぎよを上げるしえんまほうがゆうこうか。しどうのかいふくとおれののしえんがあればゆうがみはむてきだ。まずぶつりてきこうげきをふせぐしえんまほうをかけなおして――

どうしたんだゆうがみ、なんでうごかない。しどうはなんでかいふくまほうをつかわない。おれはいつまでねころんでるんだ。ほら、うえからみたらまじんのうごきなんてまるわかりだぞ。そんなしょくしゅにまけるわけがわけがわけがわけがわけが――わけが、わからない。

「勇上イイイイイイイツッ!!」

誰かの絶叫で目が覚めて飛び起きた。

「おや、開口一番それかい。元気だねえ？」

「こ、こは……？」

ダンジョンだ。直感的に理解した。ここはダンジョンだ。四方は闇に……いや、夜空のよう見える。床も天井もない。だが浮いているわけではなく、透明な硬い板にでも寝ころんでいたようだ。目の前にいるのは巨大な人型モンスター。喋る、モンスター？ 理解が追いつかない。状況を整理するべきだ。

俺の名前、神之木拓也^{かみのきたくや}。属性、闇。戦闘スタイル、支援特化魔法使い。魔神を倒すべくダンジョンに挑んだ。そして、魔神ではなく『勇者』勇士に殺され――

「ココア、飲むかい？」

巨大なモンスターが巨大なマグカップを差し出してきた。マグカップがこちらに近づくにつれて俺でも片手で持てそうな大きさに変化していく。いや、なんでココア……？ そもそもどこから出した……？ 大きさの変化は何故……？ 疑問が尽きない。

「ありや、いらぬのかい」

マグカップが目の前で消えた。中に入っていたであろうココアごと。一瞬感じたココアの香りだけが先程までそこにココアがあつたのだと証明していた。いや、ココアはもういい。今最優先で考えるべきなのはこのやたらと友好的な、喋る巨大モンスターだ。

「あ、ボクウ？ ボクはねえ」

どうやら自己紹介をしてくれるらしい。というか、こちらが考へてゐる事が簡抜けみたいだな。

「ギシンと呼ばれてゐるよ。よろしくねえ。あ、読心はカミサマ的存在の基本技能だから諦めてねえ?」

ギシン……シンが神ならギは――

「本題に入ろうかあ? 解釈は人次第だから、これからボクを見て決めるといいよお?」

本、題?

「そう、本題。君は、マジンを倒す志半ばで斃れちゃいましたあ。合つてる?」

合つてゐる。俺を入れた十人で、人類最精銳とまで呼ばれた十傑の全員で魔神を倒すべくダンジョンへ挑み、魔神を倒すことなく死んだ。魔神に倒されたのではなく、『勇者』勇上の――裏切りによつて。

なんでだ勇上。なんで言つてくれなかつたんだ……。俺達は、お前にとつてのなんだつたんだ……?

「そう、『ユウシャ』が人類を裏切らなければ、君が死ぬ事は無かつたあ」

そうかも知れない。ただ、このギシンの言葉を信じるに足る根拠は無い。

「んふふ、『ユウシャ』にマジンを倒すつもりがあつたなら、君達は十人でマジンに挑み、

勝利していたあ。信じなくともいいよお？——ただの事実だから

事実……？ 事実と言つたか。まるで見てきたかのように語るこいつは……？

「まあた本題からそれちやつたねえ。さあ、君の望みを叶えよう、と言つたら……君は何を望むう？」

望み・望み……。人類の、解放。魔神が人類に与えた影響の、排除。

「君が望むのはマジンのいない世界かなあ？ そうじやないよねえ？ マジンの恩恵にどっぷり浸かって、良い思いもしたでしょお？」

魔神の、恩恵。……魔法。

「マジンが魔法を与え、魔物を生み出し、君達みたいに戦いしか能がない人間を救つたあ」

.....。

「さあ、もう一度、君の望みを教えて？」

俺の、望みは……。

「うんうん、そうだよねえ？ 今度こそマジンに勝つて、英雄になるんだよねえ？ そのためには、お邪魔虫がいるねえ？ 人類の希望で、人類の裏切り者で、君を殺した——「勇上と、話したい」

「今、なんて？ もつかい言つてみて？」

「勇上と話して、納得できればそれでいい」

「…………」

「それだけで、よかつたんだ……」

「…………」

「頼むよギシン。お前がカミサマだつて言うなら、これくらい叶えてくれよ……」

「うーん、どうしよつかなあ。まあ、いいよ。その望み、叶えてあげるよ。安心するといい。ボクは望みに対価を求めるような悪神じやないからね？」

ありがとう、と口に出す前に、足場となつていた板がなくなり、俺は夜空の中に落ちていつた。死ぬ時は逆の感覚だなあ、とか、これから勇上と何を話そうかなあ、とか、香気に考えながら俺の意識は夜空の中を落ち続け、溶けていった。

実際豊満だつた

ふと気が付けば、先程までのどこまでも落ちていく感覺はなく、今はまるで母の羊水の中にいるかのようだつた。ま、そんな赤ん坊の時の記憶なんて残つちやいねえけど。……そう感じさせる程の安心感があつた。生きている。魔臓が血液と魔力を体中に送り込んでいる感覺は、ギシンと相対している間には感じなかつたものだ。あの時は混乱していく……錯乱していた。あの空間に妙な効果があつたかギシンによつて正常な判断が妨げられていたのかは判別できないが、今はただ本能のまま生を喜び叫ぼう！

「がぼぼぼぼぼぼぼぼ——んづづ」？

塩素臭い水が口と鼻から入つてきた。この感覺は……プールで溺れた時にそつくりだ。いやあ、懐かしいなあ。四年ぶりぐらいか？ 部隊実習の一か月前にようやく泳げるようになるまで、水泳の教務では毎回のように味わつた感覺だ。

「どうか……俺、マジで溺れてね？」

「が、がぼぼぼぼぼぼぼ！」

や、やばい。慌てて水面へ上がろうとするが、がむしやらに手足を動かしても水面までが遠すぎる。指先が水面へ届いたが、それが限界だった。沈む。死の気配が近づく。

体は間違いなく沈んでいるのに、それを上から眺めている俺がいる。おいおい、死んだ
わ、俺……。

やつちまつた。せっかく生き返ったのに、秒で死ぬとか……。いや、そもそも本当に
生き返つてたのか？ てっきり死後の世界的なところで勇上と話せると思つていたん
だが……。ギシンに感謝すべきか恨むべきか迷いどころだなあ。沈んでいく俺の体を
眺めながら、益体もない事を考えつつ二度目の死を――

迎える前に、俺の体は助け出された。俺の助けを求める声を聞きつけたわけではない
だろう。いつもはポニー・テールにしている燃えるような赤い髪を、今は水泳帽子の中に
引き詰めて、競泳水着では到底隠し切れない豊満な体で俺の体を水面まで、いや、プー
ルサイドまで引き上げた。もう会えないと思つていた人だつた。

現役時代に『紅蓮』の二つ名で呼ばれた彼女は、火属性剣士で初めて昇格した元十傑
の一人だ。現役引退後、後続の育成のため教育隊で体育教官として勤め、人工島ノアに
攻め込んだ魔獣から生徒達を守るために戦い、散つた。

「回復持ちは集合！ 走らず急げ！ 各自、準備でき次第回復魔法を使え！ 戻つてこ
い神之木イ！」

懐かしい顔ぶれが俺を囲む。どうやらここは死後の世界だつたのか、どいつもこいつ
も死んだやつばかりだ。死んでも魔法つて使えるんだなあ。いや、魔臓が動いてりや魔

力はあるんだし、当たり前か。死後の世界で魔蟻が動いてるのはよく分からんが。

回復魔法のおかげか、さつきまで俯瞰で見ていたはずの俺の視界に、あかつき暁 教官の泣き
そうな顔が入ってきた。

「氣付いたか神之木！　自分の名前は言えるか!?　まだ立ち上がり難いからな！」
とつさに起き上がるうとした体を押しとどめられた。背中にプールサイドのざらつきを感じながら自分の名前を答える事にした。

「おろ、おろろろろろろろろ

やあ、俺の名前はおろおろろろろろろ……すんません、ちょっと口から水が出ただけ
なんです。俺の名前は神之木 拓也なんです。せめて俺の名前だけは憶えて帰つて下さい……。

暁教官は俺の肩と腕を素早く引き、回復体位を取らせた。優しく俺の背中を撫でる暁
教官の手に、俺はバブミを感じ……てる場合じゃないよな、流石に。

「……ありがとうございます、暁教官。神之木学生、異常ありません」

つい学生時代の癖が出た。教育期間中はともかく、部隊配属後に自分の名前の後に学
生を付けるなんて許されない。やばい、怒られる——

「……まだしばらく寝転がつておけ神之木学生。まつたく、少しは泳力を身に付けたと
思えばすぐにこれだ。溺れる前に溺れますと言つておけ……」

どうやら暁教官は乗つかつてくれたみたいで助かつた。溺れる前に、とは無茶ぶりも無茶ぶりだが、暁教官のあんな顔を見た後では茶化す気にもなれない。

「すみませんでした……」

俺は素直に謝った。状況はまだ理解できていないが、暁教官がいなければ二度目の死を経験していたのは間違いないだろう。

「次はないぞ、神之木学生。私の教務中に事故を起こされても、私の評価に関わるからな」

評価なんて毛ほども気にしてないでしように……。暁教官は俺を医務室へ運ぶべく、剣士系から三人ほど選び、俺を担架に乗せさせた。むくつけき野郎どもに運ばれるのはいつもなら誠に遺憾だが、今は素直に感謝する。

しかし、こんな時には勇上が率先して担架を用意していそうなものだが、あの野郎、人を裏切つたばかりか救助活動すらしないってか。そりや死後の世界でそんな事してどうなる、って話だが……。

医務室へ担架で運ばれながら、なんとはなしに俺を遠巻きに見ているやつらの顔を見る。どいつもこいつも俺より先に戦場で散つたやつらばかりだ。ただただ懐かしくて、なんだか叫びたいような、泣き出したいような感覚に陥る。そんな事を考えながら

水練館から運び出される間際、俺はとんでもないものを目にした。

「勇上……？」

元からむかつくほどには顔が良かつた。『勇者』と呼ばれるのも顔だけで納得できた。そりや勿論、強さもとんでもなかつたが。ただ、顔はそこまで中性的ではなかつたはずだし、何より――

「なんで女性用水着を着てんのさ……」

（こ）、死後の世界じゃねえな、つてのは……勇上の胸部装甲と俺の魔臓が刻むビートでなんとなく理解した。

「なんでやねん……」

新たな魔法

せ、説明を……説明を要求する。医務室のベッドに身を預けながら俺はひたすら困惑していた。先ほど見た勇士の水着姿が原因だ。その胸部装甲は明らかに胸筋だけでは説明がつかない膨らみ方だつたし、そもそも女性用水着を着用していた事から理解できていない。

状況を整理すべきだ。まず現在地はおそらく……人工島ノアに作られた教育隊、その医務室だ。プールがあつた水練館から医務室までの道のりは、かつて学生時代に教務を受けていた教育隊と一致している。まあ、担架で運ばれたのは初めての経験だつたが……。

人工島ノアは太平洋に浮かぶ……メガフロート、とか言つたつけ？ 人工的に作られた島、つてのは俺でも知つてるが、詳細は知つてるやつに聞いて欲しい。あれ、太平洋で合つてたか？ それすらもあやふやだ……。この島で生まれて、育ってきたからか、ただ島としか認識していなかつた……。今度改めて調べよう。

教育隊は……教育隊だ。本土奪還を目指す戦士を育成している。この島で生まれた子供達は教育隊に入る事が決まつているが、時期はまちまちだ。理由は知らん。これも

後で調べる。俺の場合は中等部卒業後、高等部へは進まず教育隊に入隊した。

教育期間中は学生として扱われ、部隊実習終了後、正式に部隊へ配属される。教育期間は部隊実習も入れて大体一年。部隊実習が二か月だから、十か月ちょっとをこの教育隊で学生として過ごす事になる。

俺は神之木 拓也、貴重な闇属性魔法使いとして支援魔法と弱体魔法を使いこなし、十傑の一人『自在』として名を馳せていた。……十傑の数合わせとは俺の事である。俺以外の十傑は昇格^{クラスアップ}済みだったので、非常に肩身が狭い思いをした。仕方ないじやん、闇属性魔法に攻撃魔法はなかつたんだし……。強化魔法と回復魔法しかない光属性で昇格^{クラスアップ}した『勇者』と『聖女』が例外中の例外なんだつて。

属性は魔獣が生み出す魔力がどんな性質を持つていて、という話だ。決して闇属性は陰キヤ属性ではない。『聖女』の椎堂とか見てみろよ。あれは絶対陰キヤだ。『勇者』の勇上も実は陰キヤだったと俺は考えている。人を裏切るのは陰キヤつて相場は決まってるんだよなあ。

その点、闇属性はいいぞお。攻撃性能が無い代わりに支援と弱体に特化している。光属性の強化魔法も使い勝手いいけど、支援魔法の方が刺さる魔物は多い。弱体魔法？ 知らない子ですね、と言いたいが……まあ、うん。刺さる敵には刺さる。魔法抵抗を支援魔法で貫通させれば大体の魔物に弱体入るし。ただ、使い手が光属性よりよっぽど少

なくて、^{クラスアップ}昇格する事が絶望的つてところがちよつと……うーん、かなり、つらい。

^{クラスアップ}昇格は神から授けられた魔法で魔物を倒し、神に捧げるという儀式を経てようやく到達できる人類の限界点、である。教務でそう言つてた。^{クラスアップ}ここで言う神は魔神ではなく人類を守護する神々ね。その神々に気に入られなければ昇格はありえない、らしい。まあ、どかんと派手な攻撃魔法で魔物倒しまくれば強くなりますが、つて認識だ。光属性と闇属性に攻撃魔法は無いので、本来は^{クラスアップ}昇格はできないんだが、『勇者』と『聖女』は神様の依怙^{クラスアップ}聟眞で昇格した、らしい。らしいと言うのは、勇上がそう言つてた、つてだけなので、信憑性は今や地に落ちたと言つていいだろう。

あ、自分の属性は胸に手を当てて魔臓に意識を集中させればなんとなく分かるぞ。うーん、言い方は悪いが、リードでも付けられている感覚で、そのリードを辿ればこつちを見ている神様に会えて、その属性がなんとなく分かる。例えば俺の場合は、それはもう地母神かと思わせるほど豊満で、ありとあらゆるところがでつかいお姉様的神様につながつて——なんかリード二本あるな。

魔臓は一人一個しかない臓器である。だから属性も一人一つ……と言いたいが、世の中には例外というものがあり、『賢者』とか四属性持つてる。魔臓は一個だが属性は四個。世の中不公平だ。

まあ、そこまでいかずとも属性二個持ちの二重属性（デュアル）はぼちぼちいる。光

と闇のどちらかを含んだ複数属性持ちは聞いた事なかつたが……。

「…………」

固唾を呑んで属性を確認すべくリードの先に意識を向ける。火來い火來い火來い。火属性が比較的昇格クラスアップ早くて最優秀な属性なので、火属性は剣士でも魔法使いでも引く手あまただ。まあ、どうせギシンにつながつてると見たがギシンつて何属性——いやギシンちやうんかい。

リードの先に存在していたのはイケメンのあんちやんだつた。闇属性の神様ともギシンとも違つて普通に人間サイズに見える。まあ、縮尺が違い過ぎて遠近法的技法で小さく見えてる説は、ある。というか闇属性の神様と違つてめちゃくちゃフランクでこつちに手を振つてる。女神様は見下ろしてくるだけだつたのに……。

肝心要の属性は——時属性だ。時？ 時つてなんだ？ 時属性魔法？ ……一度も聞いた事がない属性だ。当たりか外れかすら分からん。困惑していると時属性の神様はポケットから懐中時計を取り出し、こちらに差し出してきた。え、くれんの？ 貰えるものは病気と仕事以外は貰うのが俺の主義なのでありがたく手を伸ばし——スカつた。どうやら触れないようだ。そりや触れるもんならまず女神様から——あ、この思考、不敬だな？ ぎりぎりのラインで踏みとどまつた気がする。危うくよく分からん時属性魔法しか使えなくなるところだつた……。

時属性の神様は、こちらが懐中時計を触れなかつた事がたいそう残念なのか、落ち込んでしまつた。とりあえず属性さえ分かれば初步的な魔法は使える。俺は医務室のベッドで寝ている俺を強くイメージした。神様につながるリードを辿り、属性を確認した後戻れなくなるやつが一定数いるらしく、無理矢理叩き起こされるところを見た事がある。まあ、俺の事なんだけど……。そりやあんな女神様、たつぱりねつとり眺めなきや損でしょ。

しかし俺は反省した。いつでもどこでも女神様を観賞するためには自力で戻れなきやましい、と。俺は何度も失敗を繰り返しながら自力で復帰する事ができるようになつた。無だ。心を無にして現実の自分の状況を強くイメージすれば戻れる。たまに煩惱で心があふれて失敗するが、時属性の神様は野郎だから問題ねえや。

「……お、戻つた」

首尾よく戻れたようだ。では続いて時属性魔法の性能チエツクだ。使えるのは……加速魔法と減速魔法？　おい、闇属性と役割かぶつてないか？　俺の気のせいならいいんだが。まずは加速魔法から試すか。

「加速魔法……クイック」

魔法の発動は声に出す必要はない。必要はないが、声に出してはいけないという決まり事もない。まあ、声に出さず発動できるようにしろ、と教育はされるが。さて、加速

魔法クイックの効果は――

「拓也? 急にボーッとして、どうしたの?」

目の前に勇上がいた。その胸部装甲は厚かつた。というかここ魔神のダンジョンやん。感覚的にはついさつき見た巨大な扉の前だ。変わらず人が一人通れるだけの隙間が空いており、冷気のようなもやと青白い光が漏れ出ている。あれ、今こいつ俺の事を下の名前で呼んだ?

「拓也さんの事だから、緊張して自分の神様を視姦しに行つてたんでしょう。いつもの事です」

いやいつも人が女神様を視線で犯してるとと思うなよ。緊張すると金玉触りたくなるとのは訳が違うぞ。つてかこの失礼な物言いの女は誰だ。椎堂に姉妹とかいたか?

『自在』のは支援魔法を掛け終われば、やる事はほとんどなくなるからのう。わしらがよほどの無能でなければ、じやが

このわざとらしい言葉遣いは『賢者』あ!? なんとおいたわしい。自慢の胸は激戦の最中にえぐられてしまったようだ……。あ、元からパッドか。……なんで睨むんだよ。「ま、やる事やつて、さつさと帰りましょーや」

『破天』！　『破天』じゃないか！　そのやる気のなさを戦闘中に出すなよ！　生きる事を諦めるな！

「……茶番は終わった？　とりあえず『自在』の謝罪を聞いてから進みましょう」

このクソアマお前に謝るのは癪だが一個だけ謝つてやんよお前の特攻のおかげで進めたのに魔神を倒せず無駄死にさせて悪かつたな『霹靂』！

「こんなどこまで来て喧嘩ふっかけんのやめましょよマジで。空氣悪いつすよ『自在』さん」

さらつと俺に責任押し付けんのやめーや『波濤』。そういうとこやぞ。死ぬ理由を他人に求めるな。

「…………」

いやなんか喋れよ『光速』。あ、いたんだ、つて言われる事を持ちネタにするんじやねえよ。だからしつと殿から消えてもしばらく気付かれねえんだよ。

「突撃！　突撃だな!?」　もう突撃していいんだな!?

お前はちょっと他の人の話に耳を傾けなさい『百獸』。お兄ちゃん付き合いきれませんよ。お前のが年上だけど。でもお前のおかげで先に進めたのも事実だ。

「あらあら……」

お姉さんぶつて余裕っぽく見せてるが、十傑で一番若い『金剛』は、ここで死んでい

いようなやつじやなかつた。

いや、俺以外のみんながみんなそうちつた。十傑として名前負けなんてしていかつた。十人そろえば、いや、俺以外の九人がそろえば魔神なんて瞬殺だつただろう。『勇者』さえ、裏切らなければ。なんで、なんでだ勇上……。

「勇上……」

「ここまで来てなんで苗字で呼ぶのさ。いつもみたいに、ひじりつて呼びなよ。ちょ一
し狂うなあ」

——こいつは、俺の知つてる勇上じやない。俺も、こいつの知つてる俺じやない。こ
れは、夢だ。俺に都合の良いように進む夢。十傑が全員そろつて魔神と戦い、勝利する
だけの夢なんだ。

なんて、なんて都合の良い夢なんだ。現実も、こうなつていれば……。

「改めて言うけど、魔神はこの先だよ。準備はいい？」

俺達は無言でうなづき、魔神へと挑んだ。十傑全員そろつての戦いだ。ギシンの言葉
が脳裏をよぎる。十人で魔神に挑み、勝つ。それはただの事実だと。ギシンの言う通り
になるのはどこか引っかかるが、このメンツならただ戦つて勝つだろう。

そして俺達は、何もできず魔神に敗北した。

二度目の死

扉の先で待ち構えていたのは、巨大な球体だつた。浮遊している。回転している。魔力が発せられている。だが、明らかに俺が前に見た魔神とは違つてゐる点が一つ。……まぶたのように見える意匠が施されてゐる。たつた一つの違いだが、心理的圧迫は大違ひだ。ただ浮遊し、回転しているだけなのに、睥睨されているように感じる。本当にあれがまぶたで、そして開いたら……目が合つてしまつたら――

「喝ッ！ 先手必勝じや！ わしの魔法で滅びよ、魔神ッ！」

『賢者』の一喝で、やつと今すべき事を理解した。魔神を相手に怖気づいていた事を遅ればせながら反省し、相手の魔法抵抗を下げる弱体魔法を発動させるべく心器に魔力を流し――何の反応も帰つてこない事に愕然とした。

「な、何故じや？！ 神器がわしの声に答へん！ 皆はどうじや？！」

魔臓から生み出される魔力を、人の意志で武器とするための、心器。^{クラスアップ}昇格の際に神から与えられる、神器。共通するのは魔法の発動に必須という点。だが、神器を以てしても魔法が発動できないという状況はこれまでなかつた。神器は宿主の魔力を必要としない。^{クラスアップ}昇格をした者は、魔力切れという限界すら超越する。

「ボクが部屋に入る前にかけておいた強化魔法も、効果がなくなつてゐるみたいだね……」

勇上が魔神を見据えながら言つた。その手には『勇者』を『勇者』たらしめる神器、聖剣が——ない。背中にも、聖剣を吊るしていた形跡すらない。聖剣なしでどうやつて戦うつもりだ？ 心器は意志の武器、形を持たないんだぞ。武器も神器も持たずに戦えるのは……魔法使いだけだ。

もしかして、この、勇上は……『勇者』じや、ない？

『金剛』！ 『破天』！ 私と共に前へ！ 『百獸』と『光速』はかく乱！ 魔法組は一旦距離を取つて！

ガワだけ椎堂に似た女は武器を手に叫ぶ。言われるがままに下がつてしまつたが、勇上も俺と同じく魔法組のラインまで下がつてきた。俺の勇上に対する疑問をそのまま口にした。

「勇上、神器は……？」

俺の知らない勇上は、魔法使いと見るべきだろう。だが、何故昇格（クラスアップ）の証たる神器を持つてないんだ……？

「……拓也、流石にこの土壇場で昇格（クラスアップ）するなんて奇跡、起こらないよ。今は『聖女』として、なんとしてでも回復魔法を使えるようにしないと」

勇上が、『聖女』？　じゃあ、あの椎堂によく似た……いや、俺が知らない椎堂は——「くつ、かつてえ……っ！　神器でも傷一つ入りやしねえって、こいつあなにでできてるんですかい！」

「私の神器ちゃん、貫通力には自信があつたんだけど……っ！　『勇者』ちゃんの武器はどうかしら？」

『破天』と『金剛』の猛攻が魔神を襲う。だが、魔神のゆつくりとした回転にすら影響は与えてない。『百獸』と『光速』も魔神を攻撃するが、魔神はただまぶたを閉じたまま回り続けている。

ただ一人、人の手によつて鍛えられた武器を持つた椎堂……『勇者』は、神器の攻撃になんら痛痒すら感じさせない魔神を相手に、鞘を捨てた。その手にある武器は刀。刃渡りは小柄な『勇者』の身の丈を軽く超えるそれを、『勇者』は大上段に構え——

「——チエストオオオツ!!」

力の限り振り下ろした。身の守りなど考慮しない全力の攻撃。人類が継承してきた觀智を形にした大太刀による攻撃は、『勇者』の技量により神器による攻撃と比しても見劣りしなかつた。しかし、

「……これもダメ、と。神器や魔法だけが封じられた、というわけではなさそうですね」無情にも、勇者の大太刀は魔神に触れた瞬間に碎けた。神器での攻撃と同じく、魔神

には傷一つない。ただ純粹に、硬い。弱体魔法さえ刺されば、あの球体を豆腐のようにできるというのに。俺はただ、その魔法の発動すらできない現状に歯噛みし、いつ魔法が使えるようになつてもいいように魔神を睨み付け——異変に気が付いた。

武器を失つた『勇者』は魔法組と同じところまで下がつてきている。剣士組は神器での攻撃を続けている。俺以外の魔法使い組と『勇者』は、魔法を発動させるべく、神器と心器に意識を集中させている。

魔神のまぶたはただの飾りや模様ではなかつた。うつすらと開き、青色の魔力光を噴出させている。剣士組もそれに気が付き、開きつつあるまぶたの辺りを目掛けて攻撃を集中させるが、魔神の回転すら止めることはなかつた。

魔神のまぶたが開ききつた時、その場に立つ者は誰もいなかつた。俺も例外ではなく、まぶたを開ききつた魔神の眼球と目があつた瞬間、体から力が……魔力が抜け、魔眼が止まつた。

俺以外の十傑も、多少の差はあれど同じように死んだ事を上から見届けた俺は、二度目の死を迎える——ギシンと再会したのだつた。

ギシンとの再会

「ダメダメだねえ」

ギシンと再会したら、開口一番にダメだしされた件について。
 「そりやねえ、未来を知つてゐるつてアドバンテージ、活かしたいのは分かるよお？　でもさあ、『ユウシャ』が女になつてゐるのを見ても前回と全く一緒の行動取るう？　ありえないなあい？」

なんか口調がうざいギャルみてえだな、と思つたらギシンがでかいギャルに見えてきた。こいつギガントとか呼ばれてそう、というのがこいつへの第一印象だつた事を考へると——ん？　今度は雌型巨人に見えてきたな……。というか、前回と全く一緒と言われても、魔法を封じられた魔法使いが、魔神相手にどう動けつて言うんだ。

「そこじやなくてさあ……クラスアップを目指さないのはボクが教えなかつたが故の無知なんだろうけど、せめて『ユウシャ』がなんでクラスアップできたのか、とか少しは考えて行動して欲しかつたなあ」

そりや昇格クラスアップできりやそれに越した事はねえけど、『勇者』と『聖女』が光属性の神様に特別好かれてただけの話じやなかつたか？……いや、その話も男の勇上がそう言つ

てただけだつたか。そりやどうにか昇格できなかるべキだな。

「ああ、もう……少し頭を回せば分かる事を、君は四年間もお……」

四年間？ 俺とギシンの間になんか齟齬があるな、と思つたが……ひよつとしてひよつとすると、俺が時魔法を使つた事をご存じでない？ 加速魔法クイックの効果つて、年単位の時間を加速させるのかよ。こわ。闇魔法と役割かぶつてなかつたわ。すまんな、時属性の神様。

「時魔法？ それって……あ、そういう、事かあ」

何か知つてゐるのか雷電。知つてゐる事はキリキリ話して貰おうか。前回お前に良いように喋らされた恨みを忘れるほどの時間は経つちやいないぞ。

俺が今聞きたい事は……俺の知つてゐる勇上はどこへ行つたのか、俺の知らない勇上がいたあの状況はどういう事なのか、俺の属性が増えていたのは何故か、加速魔法クイック使用後の状況をギシンからはどう見えていたのか、魔神に攻撃が通用しなかつたのは何故か、魔神を相手に魔法が発動できなかつたのは何故か、つていうかさつきからギシンの姿が七変化していく気が散るんだがこれ何？ それから――

「ああ、もう、多いよお……別に答えてあげてもいいけどさあ？」

なんだよ。やっぱり対価を要求する類の悪神かお前。なら対価には勇上の魂を差し出せず。もちろん俺を裏切つた方な。

「……、あんまり長居できないんだよねえ」

それを先に言えや！ と俺は食い気味に叫んだ。ギシンの言葉が終わる前に足場にしていた感触がなくなり、俺の体が落下を始めたからだ。意識を強く保つ。一瞬でも気を抜けば、俺の意識は海水に垂らした一滴の真水のようにこの夜空の中に溶けていくだろう。それは宇宙に身一つで投げ出されるようなもの。ギシンがいた方向を見やれば、なんとギシンもこちらと一緒に落下していた。前回はどうだつたかあやふやだが、一人で落ちてたような気もする。

「うーん、このまま話すのはちょっと難儀だよねえ……まあ、とりあえず自分の体と意識に集中してると、氣を抜いたら体まで溶けんのかよ!?」

「その言いぶりだと、氣を抜いたら体まで溶けんのかよ!?」

叫んでから気付いたが、明らかに違う。体がある。まるで意識していなかつたが、どうやら先程までは意識だけ存在していたようだ。恐ろしい事に、全く違和感がなかつた。今も体の隅々まで意識しないと、夜空と体の境界線がぶれる。

「まあ、そういう空間だからねえ。君の疑問に答えるのはやまやまだけど、諸般の事情により巻きでいかせて貰うねえ？」

落ち続けてもうどれだけ経ったか分からぬ。ギシンの言葉に耳を傾ける余裕すら失われつつある。なんでもいいからさっさとしてくれ！

「じゃあ、せつかくだから、ボクが作つたパワーポイントから、見ていいこうねえ？」

もうなんと言つていいか半分ぐらい分からんが、俺をおちよくつてることだけは理解した。マジで許さんぞギシン。お前は間違いなく悪神、いや邪神の類だ。

「じょーだん、じょーだんだよお。……うーん、一言でまとめよう。これだけは集中して聞いてくれ」

先程までしていた煽りとしか見えないにやけづらを急にギシンが引っ込め、真面目な顔になつた。途切れそうな意識を振り絞り、ギシンの言葉に集中する。

「僕も行くよ」

え、今なん――

「がぼぼぼ？」

あまりの衝撃に、まるで口と鼻から水が入つてきたように感じた。やたらと塩素臭いこれはプールの水だろう。つまり、プールで溺れるくらいの衝撃だった。……いや、もつと驚いた気がする。え、あいつさつきなんて言つた？

僕も行く、つて言つてなかつたか？なるほど、それなら驚くのも納得だ。ギシンつて自称神様なのに、意外とフットワーク軽いのな。神様つてもつと、なんかこう、あり

がたみが強くて、こちらが崇め奉つても意に介さないイメージだつたわ。まあ、うちの女神様の話なんだが。

現実逃避はここまでにしよう。現状、溺れてる。プールで。多分教育隊の水練館で。このまま溺れても救出される可能性は高いが、万が一はいつだつて起こりえる。水を吸つてしまつて苦しいが、今すべきなのは落ち着いて水をかき、足を蹴る事だ。焦つてもがいても、沈みはしても浮きはしない。

胸の前で手を合わせながら足のかかとを尻に引き付け、水面目掛けて腕と足を一気に伸ばす！ たつた一度で水面に顔を出す事に成功し、咳き込みながらも息を吸つた。シャバの空気はうめえなあ！

「神之木！ 大丈夫かつ！」

暁教官が救命浮環を持つてこちらに近付いてくる。なんとか無事を伝えたかつたが、俺の泳力では立ち泳ぎしながらの会話はできない。俺は素直にプールサイドへ平泳ぎで向かつた。

「す、すみません暁教官！ 足がつてしまひました！」

プールサイドに掴まりながら、まず暁教官に謝つた。足がつっている、というのは？

ではない。プールサイドに向かうまでの間に、つてしまつた。ただそれだけの事。

……俺の体、貧弱すぎんか？ 四年前の俺つてこんなにもやしボーアだつたつけ？

「……そ、うか。な、ら、い、い。神之木学生、プールから上がつたら見学の位置」

「はい！」

暁教官の手を借りながらプールサイドへ上がり、まずつった足を伸ばした。暁教官の手は戦士の手だつた。端的に言うと、バブミではなくゴリラみを感じてしまつた。魔法使いでも、肉体練成から逃げてはいけない……。その事を強く痛感した。

俺は、弱い。辛うじて魔法だけは人並み以上だが、それ以外は軒並み目も当てられない。十傑に選ばれたのは、ただ闇属性魔法が得意だつたというだけ。自覚しろ。俺は、弱い。このままでは魔神に勝つどころか、ダンジョンでも足を引つ張るだろう。強くならなければならぬ。心技体、全てを揃えてもまだ足りない。神を相手取るには、人間の限界など超越して当たり前なのだ。

俺は見学者用の椅子に座りながらふと思つた。
ギシンどこ？

ギシン問答

……ギシンの野郎、僕も行くよ、なんて格好つけて言つたくせにどこにもいねえじゃねえか。いや、あの巨体が教育隊に出た日には大騒ぎどころか即座に第一種戦闘配置が令されるだろう。今も教務が中断されていないという事は、あの巨体は教育隊の誰にも確認されていない、と言い換えてもいい。……学生は戦闘配置がかかつたらどこへ行けばいいんだろう。分隊事務室前か、別に令されるまで大講堂か。まあ、元十傑が教官にゴロゴロいるし、学生の出番はないな。

あれやこれやと考え方つとも教務は進む。どうやら今回の教務は飛び込みからのダッシュを主眼に置いているようだ。測定が近いのだろう。少しでもタイムを縮めようと同期達は頑張っている。一方の俺は、教育隊での成績になんの興味もなくなつていた。むしろ下手に好成績を残そうものなら、部隊配属後に期待され過ぎて動きづらくなるだろう。今俺がすべきなのは、女性陣の水着鑑賞……ではなく、ギシンがどこにいるのか考える事だろう。

ギシンは自称神様だ。俺が他に見た事がある神様と言えば、俺とつながつてゐる闇属性の女神様と、時属性の神様。そして……思い出すだけで身の毛がよだつ魔神。この中

で実際に触れられたのは魔神の一柱だけ。後は謎空間で出会ったギシンと、俺の魔臓につながる先で出会える二柱……。

俺は今一度胸に手を当て、魔臓に意識を集中する。俺の魔臓につながるリードを探す。俺の魔臓につながるリードは、一本。いやいや、そんなはずないじゃん。もう一本ある。あるはずだ。多分、こう、なんか見えにくいところとかにあるつて。だつてそうじやなきやこれ、俺の属性が闇と時からギに変わつたつて事だぞ。時属性は将来性に期待できるがぽつと出の属性だ。だが闇属性を持たない俺つてもう十傑の末席に食い込める気がしないんだが……。俺が十傑に入れたのは、闇属性魔法使いというぼちぼち希少な存在で、『勇者』の同期だった、という二点が大きかつたはずだ。

ああ、属性確認するのやだなあ、と思いつつ何度見ても一本しかないリードの先に意識を向ける。どうせこの先にいるのはギシンだ。俺の守護神でも氣取るつもりなのだろうか。魔力の属性は神様の属性になる、というのがこれまでの通説で、俺もそれを支持していたが、これからは否定派に回りたいと思う。リードを辿つた先にいたのは——いやギシンちやうんかい。

それは女神だつた。美しくも恐ろしく、地母神を思わせる肉体と傲慢さを隠し切れな

い表情が共存している。というか闇属性の女神様だつた。いつもの、やつだつた。ギシン……どこ？ 全部夢とかそういうオチか？ やめてくれよ……俺、めちゃくちや痛いやつじやん。

女神様はいつも通り、腕を組みながら流し目でこちらを見下している。眼福です。ありがとうございます！

女神様も鑑賞したし、そろそろ戻るか、と思ったところで気が付いた。女神様が組んだ腕。見えづらいがその指先が、こちらに向いている。ほわっ？ 何事だろう。こちらの身だしなみに粗相があつたのだろうか。

思わず確認するが、そもそも意識しかないのだから体なんてない。——意識しかないのだから体なんて、ない？ 本当にそうだろうか。……ギシンと出会つたあの空間で経験した事を思い出せ。体の隅々まで意識を張り巡らせろ。俺の体は、ここにある。

「う、おつ……」

急に感じた重力にたたらを踏んだ。だが、足裏から感じる床の硬い感触がある。声が出来る。息もできる。魔臓が魔力を生み出す。すると、急に視界が開けた。

ダンジョンだ。壁も、床も、天井も、どこを見ても直感的にここがダンジョンだと理解できる。この感覚は、ダンジョンの中しかありえない。ここは、女神様のダンジョン、なのか？

せつかく声が出せるようになつたので、女神様に聞いてみようと思ひ女神様を見やると――

「やつと会えたねえ」

ギシンがいた。貴様あ！　女神様をどこへやつた？　女神様を返せ！　返答次第では戦争だぞ！

「君の疑問に答えてあげようと思つてたけどお、そんな態度を取るならボクにも考えがあるよお？」

「すみませんでしたあ！」

食い気味で謝つた。神様仏様ギシン様！　どうかこの哀れな人間めに慈悲をお与えください！

「そこまでへりくだるのかい……先に断つておくとお、君の疑問の全てに答えを示せるわけではない、つて事は理解して欲しいなあ」

「なんだよ使えねえなあ。ちつ、女神様もいなくなるしついてねえぜ。

「君い、情緒不安定すぎるねえ。これも人間のもうさ、かあ」

「今俺の事を面白いつて嘲笑つた？」

「してない。さてえ、君の疑問を早速一つ解消しようかあ」

くつそ、ギシンと会えて躁鬱の躁になつてゐる。浮かれているんだ。これまでの四年

間が嘘じやなかつたと心底安心している。更に自称とはいえ神様が味方っぽい雰囲気だしているし。後はもうチート能力貰つて魔神ぶつ倒して俺の物語は終わりだろう。で、何から教えてくれるんだ？

「君が崇めていたあの女神い、実はボクなんだあ」

「ダウト」

嘘乙。これは流石に嘘。嘘松もいい加減にしろよ。

「君が崇めていた女神は僕の別側面だよ」

マジトーンで言い直すのやめろや。認めたくねえんだよこつちは。余りの衝撃に体を維持できてないの見れば分かるだろ。はいはい、この話はここで終了ね。そうでないと俺の自我が崩壊するぞ。これまで何度も鑑賞してお世話をなってきた女神様が、一人称オデとか言つてそうな見た目のギシンと同一存在とか俺は信じない。

「ボクの見た目はあ、見る者によつて違うみたいなんだあ。それも、固定されたものではなくて、イメージによつて移り変わるう……水面みたいなものかなあ」

その話まだ続く？ 僕は体を維持するのに集中してて聞こえてなかつたわ。他の話をしてくれよ。

「それじやあ……君の時魔法だけどお、この後でまた、使えるようになるから安心していいよお」

「後で、つてのはなんでだ？ 神様とのつながりが切れた、なんて話聞いた事ないんだが」

「それはねえ、そもそもこの時間軸ではまだつながってない、としか言えないねえ」

……？ 俺が時魔法を最初に使ったのは勇者に殺されて、溺れて、医務室に運ばれて、そこで初めて時属性の神様を見て、だつたか。まだ時属性の神様は、俺とつながっていないという事は……時が巻き戻つたと判断すべき。だが、それなら勇上はどうなる？ 時が巻き戻つたのなら、勇上が女になつているのはおかしい。

「君の知る『ユウシャ』が、女で『セイジヨ』になつていたのはあ……」

やはり知つてはいるのか雷電。

「僕にも分かんないや」

F U C K Y O U 、ぶち殺すぞギシン。

神殺しの器

ギシンの言葉に俺は殺意を抑えきれなかつた。というか、抑えるつもりもさらさらなかつた。殺意だけで相手を殺せるなら殺せなければおかしい、というほど俺の殺意が高まつた時、俺の殺意は発露した。空中に突如剣が現れたかと思うと、ギシンに向かつてまつすぐ飛んで行つたのだ。ギシンの憎たらしいにやけづらにその剣が突き刺さり――

「これも教えようと思つてた事の一つだよ」

何事もなかつたかのようにギシンは喋りだした。剣もいつの間にか消えている。いや、剣が刺さつたはずの顔にはひびが入つていた。まるで仮面にひびが入つたようだつた。そのひびの下に見えるのは……俺もよく知る、何度も見た顔だ。認めたくはなかつたが、ギシンと女神様が同一存在だとストンと腑に落ちた。

ギシンの言葉は続く。

「意志の具現化。激情の刃。形を持つた心器。……神を唯一傷つける、人だけに許されたモノ」

歌い上げるように朗々と喋るギシン。にやけづらが剥がれ落ちながらも意に介さな

い。これはそれほど重要な事なのだ、と言わんばかりに。

「神を唯一、傷付ける……？」

その言葉が本当なら、魔神を相手に武器や神器が通じなかつたのも当然だ。たとえ魔法が使えていたとしても、まるで通用しなかつただろう。

「神はそれを真器と呼ぶ。神を真に滅ぼせる神殺しの器が故の、真器。——まあ、使い勝手は心器とそう変わらないから、安心していいよお」

急に碎けた口調に戻るな。温度差で風邪ひくわ。しかし、

「ちよ、ちよつと待つてくれよ。そんな大層なシロモン、なんで俺が使えるんだ？ 形のある心器なんて今まで見た事も聞いた事もねえし、俺が人類初の真器の使い手なんてありえねえ！」

俺の素質は言つちや悪いが並みよりちよつと上程度だ。闇属性魔法以外にパツとするところがない、十傑で唯一の未昇格者。歴代の十傑で、俺より優れた闇属性魔法使いなんていいくらでもいたことだろう。そんな俺が神器通り越して真器が使えます、だなんていくらなんでも都合がよすぎる。

「真器を使うにはいくつか条件があつてねえ。全部をクリアする必要はないけど……君はすでに二つクリアしている。想像力がものをいうダンジョンの中でなら、君にだつて使えるさあ」

「条件を二つ……？」

魔神との遭遇、か？ それならこれまでの人類が真器の存在にすら気が付かなかつた、という事は理解できる。魔神と直接相対したのは、人歴史上俺達が初めてだつたらな。後の一つは……人の手で殺され、神の手で蘇つた、つてところか。

「うーん、惜しいとこ突くねえ。一応答え合わせをしておくと、神と直接対峙した事、そして真器をその目で見た事、この二つだねえ」

真器を、見た？ 一体どこで——ふと脳裏によぎつたのは、俺の命を奪つたちやちな短剣。俺の支援魔法をたやすく貫通した刃。『勇者』勇上は、あの男の本質は、神器である聖剣の使い手ではなく、真器である短剣の使い手だつた？

「その通りだよお。あの時点の『ユウシャ』には、マジンを倒す手札が揃つていたあ」「……そして『聖女』勇上が真器使いでなかつたから俺達は何もできず敗北した、つてか。ギシン、たしかお前、初めて会つた時に……俺達十人なら魔神に勝てるつて言つてたよな」

「そうだよお。真器使いがいれば、カミサマだつてイチコロさあ」

少しづつ、分かつてきたり。あの時の俺達は、本当に惜しいところまで行つたんだ、つて。だからこそ、余計に分からない。何故勇上は俺達を裏切つたのか……。
「それを確かめる方法が、一つだけあるよお、つて言つたら——乗るかい？」

いつの間にかギシンの顔は、ひび割れた仮面ではなく元のにやけづらに戻っている。だが、感じる雰囲気にふざけた様子が感じられなかつた。ギシンはギシンなりに、本音で喋つてゐるのだろう。

「乗るさ。……お前の思惑に乗つてやるさ」

ギシンが俺に、何かをさせたがつてはいたのは事実だろう。そしてそれは、勇上や魔神に関係がある。俺に何をさせたいのかは、重要ではない。重要なのは、俺の望みが叶うのかどうか、だ。

考えはまとまつた。俺は意を決してギシンを睨み付けた。

「ギシン、お前が何を企んでるのかは知らねえ。興味もねえ。俺の望みを叶えてくれるつてんなら、いくらでも崇めてやるよ」

これは嘘偽りない本心だ。だからこそ、俺の心に誓う。

「俺の望みが叶わねえなら、俺の真器は魔神の前にお前を滅ぼす」

すでに一度、いや、二度も死んでいる身なんだ。こんな安い命でよければ、いくらだつて賭けてやる。だがなあ、

「俺はお前に全部賭けるんだから、お前も俺に全部賭けやがれ！」

賭け金が釣り合わねえのは百も承知だ。だが、お前も俺に賭けざるを得ないんだろう？ 隠しちやいるが、切羽詰まつてるんだろう？ こつちだつてお前に賭けざるを得な

いし、お前以上に切羽詰まつてんだよ！」

「……どうやら時間切れみたいだねえ。次は時間がある時においでよお。ここで待つてるから、さあ」

ギシンの言葉を皮切りに、自分の意思とは関係なく周囲がぼやけ、あやふやになつていく。ここではないどこかで、誰かが俺の体を揺さぶっている。現実で、起こされてい

る。

「最後にこれだけは言つておくねえ。——もう全部賭けてるよ」

最後の最後、ギシンは苦虫を噛み潰したような顔をしていた、気がする……。そんな顔もできるのかよ……。俺の意識は、現実へ戻った。

初めての神器

「おい神之木、そろそろ整列だぞ」

俺を揺り起こしていたのは西村だつた。たしか……教育課程の後半で肺気胸が見つかつたとかで、体を動かす教務は見学していた気がする。そして配属先は教育隊となり、暁教官らと共に学生を守るために戦い、散つた男だ。

「ありがとな、西村」

西村の顔を直視できず、俺は顔をそむけた。戦死者・行方不明リストで名前を見た時の事をどうしても思い出てしまい、普通の顔を向けられる自信がなかつたからだつた。

「……？ まだ足つてんのか？ 一人で立てるか？」

「……いや、もう大丈夫だ」

軽く深呼吸して西村を見た。優しい奴だ。俺は西村に、上手く笑つて返せただろうか。

「勇上学生基準！ 三列横隊、集まれ！」

声を張り上げたのは林田だ。どうやら今日の当直学生だつたらしい。最初から見学

していた体育服装の西村は列外に並び、俺は三列横隊の最後に収まつた。
ふと三列横隊の基準となつた勇士を見たが、着用していた水着は女性用のそれだつ
た。

今日の教務と別科が終わつた。配食を受け取り、風呂に入り、掃除をして、自習も終
わり、今は就寝までの自由時間だ。この時間まで本当に長かつた。配食の受け取り方
も、風呂の入り方も、掃除の場所も、自習時間にすべき事もすっかりと抜け落ちていた。
日付を確認したが、この生活が後一ヶ月は続く。部隊実習中も、扱いは学生と変わらな
いから実質三ヶ月か。つ、つらすぎる！ クイック使って飛ばせねえかな、と考えたと
ころで思い出した。

時属性の神様とのつながりは戻つたのかどうかまだ確認していない。そしてギシン
に確認すべき事がまだ残つている。

ギシンとの問答で、得られた答えはそう多くない。俺が崇めていた女神が、実はギシ
ンだつた事。時属性の神とのつながりは、再びできるという事。こつちの勇士の事は、
ギシンにもよくわからないという事。そして魔神討伐に必要不可欠な要素、真器。
長丁場になる事を覚悟して、俺はベッドに横になつた。消灯まで三十分以上あるが、

早く寝る分には問題ない。俺は胸に手を当て、魔臓を意識した。

おそらくギシンと時属性の神様、二本のリードが俺の魔臓につながっているだろう。リードの見た目からは、どちらにつながっているかは分からぬいため、先に時属性の神様に会つてしまふと少し気まずいな……。この辺り、二重属性^{デュアル}のやつらとかどうしてるんだろう。『賢者』とか四属性だし、苦労してんんだろうなあ。ははは、まあ、俺のリード七本に比べたらどんなやつだつてよゆーでしょ。いやあ、あははははは……はあ。

「どうしてこうなつた……」

俺の魔臓につながるリードが、七本に増えていた。実は貫通している四本なのかとか、伸びる先で実はつながつてるとか、そんなトリックじみた仕掛けはない。おかしいな、うん、おかしい。一足す一つて二じやなかつたか？ ギシンと時属性の神様以外のリードはどこから生えた？

これがチートつてやつか。おい知つているかギシン。『賢者』が四属性持ちなのは有名な話だが、初任戦士の頃は魔法の制御と消費魔力で苦労してたつて裏話を知つてるか？ ラーメンにトッピング全部乗せしたら、見た目は最強だが料金もカロリーも跳ね上がるのだ。……いや、流石に話がずれたな。

改めて胸に手を当て、魔臓からつながるリードを確認する。うん、何度見ても七本ある。俺は覚悟を決める。このリードの先にどんな神様がいても現実を受け止める、と。

俺は恐る恐るだがなんとなく目に付いたリードから辿っていく事にした。

ギシン、どこ行つた？

気が付けば朝だつた。首だけ動かし壁に据え付けられた時計を見ると、まだ朝の六時前だつた。まだもう少し寝られたな、と一瞬思つたが、違うそうじやないと正気に戻つた。

ギシンだギシン。ギシンがいなかつたのだ。正確には、俺の魔臓からつながるリードを辿つてみても、ギシンそのものがいなかつた。少なくともガワはギシンではなかつたし、意志疎通も図れなかつた。時属性の神様以外は以前までの闇属性の女神様と同じく、こちらをじつと見てくるだけだつたのだ。

そして時属性の神様は、初めて会つた時と同じく、ポケットから懐中時計を取り出し、こちらに差し出してきた。前回は触れる事すらできなかつたが、今回は――

突如ラッパの音が鳴り響く。それと同時に、先程まで静かだつた隊舎が、騒然となつた。マル口クマルマル、総員起こしだ。同室の同期達は、寝巻から作業服に着替え我先

にと部屋を飛び出していく。俺も一瞬出遅れたが、すぐに着替えて部屋を出た。普段使
いには向かないだろう懐中時計を、下衣のポケットへしまいながら。

総員起こしの後は、朝の体操と配食だ。その後は午前の教務に備え、服装の整備や準備物を用意する。だが俺は、どうにもやる気が出ず懐中時計を手に取つて眺めていた。実用品というより鑑賞品と思わせるような精密な彫刻が蓋と竜頭に彫られている。竜頭に付いているボタンを押し込み、蓋を開けた。盤面にはギリシア数字と短針のみの非常にシンプルな時計だった。ギリシア数字という時点でかなり使いづらいのに、長針が付いていないというのは致命的だ。高そうな見た目も相まって、俺の手にはまるで馴染まないと思われた。

だが不思議と、馴染む。真鍮製のような見た目のため重さもそれなりと思つたが、手の中に収めると気にならない重さだ。俺は懐中時計を手の中でいじくりまわした。

そして、自然と笑みが出てくる。ついに俺は人類の限界点を突破したのだ、と。

まるで加速魔法クイックを使ったかのように時が流れるのは一瞬だつた。今は教務

と別科が終わり、配食も終え、風呂に向かうところだ。教務はすでに特技別教育に移行し、同属性の先達を教官としてより実践的な知識を供給されている。部隊実習まで約一ヶ月ほど。教育課程の総仕上げと言つてもいい時期だった。浴場の扉を抜けると、他の学生たちはどこかそわついた様子だ。無理もない。特技別教育に入ると、実戦が近いと実感できる。もう間もなく、俺達は命を懸けて戦場に出るのだ。

俺は手早く頭と体を洗い、湯船に浸かった。今も頭の内のはとんどはあの懐中時計の事を考えている。時属性の神様が持つていた懐中時計と、うり二つの懐中時計。あれはまぎれもなく、神器。^{クラスアップ}昇格した際に神から与えられる奇跡の象徴。だが、どこかしつくり來ていらない部分もある。

^{クラスアップ}昇格とは魔物を魔法で倒さなければならぬ、とされている。だが、それでは攻撃魔法を持たない光属性と闇属性、そして時属性では^{クラスアップ}昇格は不可能だ。俺が知る例外は『勇者』勇士と『聖女』椎堂の二人だけ。あいつらもこうやって^{クラスアップ}昇格昇をしたのだろうか。対価も無しに。

そう、対価。ギシンは対価を求める、と言つていた気がするが、何かを俺に期待していた。何か目的があつて俺を助けた。だが、時属性の神様が俺に何を求めているかが分からぬ。あのイケメンのあんちやんを疑いたかないが、あれもギシンの別側面とか言わると納得してしまいそうになる。

そして、時属性の神様以外の俺とつながる神様達。属性は、闇、光、火、風、水、土の六柱。いずれも女神であり、俺好みの恵体であつた。だが、多分ギシンの別側面なのだろう。うーん、美女ぞろいなんだが……残念だと言わざるを得ない。

今後の方針として、まず長期的目標としては勿論『勇者』勇上の真意の確認だ。次点で魔神の討伐。短期的目標としては約一年後にある、魔獣の侵攻から人類安全圏を防衛する事。これらに共通する必要事項として、人類の戦力を向上させる必要がある。果たして俺一人に何ができるのか。手探りでも、探しなけばならない。

決意の夜

「勇上、ちょっとといいか」

俺は教務の合間を縫つて、勇上に話しかけた。俺に今できる事、そして目標を考えた時、勇上と話す事が最優先事項だと結論付けたのだ。図らずしも時属性という攻撃魔法を持たない属性で神器を得る事ができた事から、勇上が神器を得るための手助けも可能だろう。人類最強戦力だつた『勇者』勇上を再現できれば魔神戦でも心強いし、俺を裏切つた『勇者』勇上の目的が理解できるかも知れない。打算ありありだが、人類のためという大義がある限り躊躇うつもりはなかつた。

「神之木？ どしたのさ。珍しーじやん、ボクに声かけるなんてさ」

そりや俺が女子に話しかけるのは珍しかろう。自慢ではないが、俺の対人対話能力は平均程度。更には戦地ならともかく、平時において年頃の女性と話す時にはデバフがかかるのが常だつた。つまり、端的に言うと……気後れしていた。前髪を綺麗に切りそろえた黒髪ロングのストレートに、自然と行われる綺麗な所作。それだけならただの清楚な美少女だが、喋り方とのギャップで親しみやすさがある。ただその親しみやすさは、俺のような闇属性にはちょっと眩しすぎた。

「あー、その、なんつーか……いくつか確認したい事があつてな」

「午後の試験の範囲とか？ ボクもあんまり自信ないけど……」

「いや、そうじやねえんだ。勇上つて特技別教務は光属性のやつ受けてたよな？ 剣士が魔法使いか、もう決めたか？」

「あ、神之木つて闇属性なんだっけ。お互い、攻撃魔法がない属性はつらいよね。ボクは剣に自信がないから魔法使いにしたけど、神之木はどうすんの？」

剣に自信がない、か。できれば勇上には『勇者』を目指して貰いたい。だが、無理強いしても意味はないだろう。なんとか翻意させたいところだ。

「俺も魔法使いにした。けど、勇上つて運動神経良くなかったか？ 格技の授業でも剣道を——」

「ちょ、ちょっと、変な冗談やめてよ！ ボクなんて下から数えた方がよっぽど早いつて」

食い気味に否定された。はて、『勇者』勇上は歴代最高記録を叩き出して教育隊を修業したはずだつたが。

「……お兄ちゃんじやあるまいし」

「……今、お兄ちゃんつて言つたか？ 勇上がうつむきながら呟いたその言葉を、俺は聞き逃さなかつた。

「その、お兄さんの話、聞いてもいいか?」

「すげえ地雷な予感はするが、今は踏み抜かなければならない。たとえ勇上との仲がこじれるとしても。」

「あ、ごめん、聞こえちゃつたか。……ボクのお兄ちゃん、運動神経がすっごく良くてね、戦士として期待されてたんだ。ボクは出がらしなんて呼ばれたりしたけど——病気で死んじやつた」

「そう、だつたか。そうだつたのか……。」

「……変な事聞いて、悪かつたな」

俺の知る『勇者』勇上は、すでに死んでいる。この世界は、俺の知っている世界ではない。ギシンは、ただ時を巻き戻したのではない。そもそも、ギシンは一言でも時を巻き戻した、なんて言つただろうか。

「ううん、気にしてないで。そろそろ次の教務が始まるし、席に着いた方がいいよ」

勇上との距離が少し……いや、かなり開いた気がする。無理もない。話したくなかったであろう兄の話を、無理矢理聞き出したのだから。

俺は大人しく自分の席に戻った。部隊実習が、近い。

毎夜ごとに神様達とのつながりを辿るが、リードの数も行先も変わらない。女神達はただ俺を見下ろすのみ。時属性の神様は、俺に懐中時計を触らせた日から、まるで時が止まつたかのように動かない。ギシンの姿はあれ以来見えない。

ギシンの言葉をどこまで信じるのか。ギシンは何故姿を見せないのか。ギシンは味方なのか、敵なのか――

結論を出せないまま、俺は教育隊最後の夜を迎えていた。

「ねえ……まだ起きてる……？」

消灯後の部屋に、同期の林田の声が小さく響く。寝台の上で身じろぐ衣擦れの音があちこちから聞こえた。

「むしろ寝てるやつおるん?」

関西訛りのこの声は、同期の佐藤だろう。こいつの方言はやたらと耳に残り、時々使つてしまふ癖が付いてしまった。

「ちよ、佐藤君……声大きいって……」

林田が佐藤を注意する声が聞こえる。だが、

「問題ねえよ。ちつとは多めに見てくれるさ」

俺は佐藤と同程度の声の大きさで喋った。耳を澄ませば、他の部屋から忍び笑いをする声が聞こえてくる。窓の外に目をやれば、白いものがちらついている。どうりで寒い

わけだ。

「そ、 そうかなあ…… そうかも」
林田の声量が少し上がった。 その事に気が付いた西村は、 笑いをこらえながら身を起こした。

「お、 お前ら、 あんまり笑わせるなよ」

「なんや、 西村はんも起きとつたんやつたら話入つてきたらええのに」

「寝ようと思つてうとうとしてたのを、 お前らに起こされたんだよ」

「ダウト。 お前、 寝付けなくてずっと寝返り打つてたじやねえか」

「やつぱりみんな寝れないよなあ。 明日には部隊へ移動だし……」

「この部屋は見事にばらけたよな。 僕はここ、 林田は北部、 佐藤は中部、 神之木は東部。 合つてるよな？」

「ま、 生きとつたらまた会う事かでありますやろ。 なんかの間違いで十傑に選ばれる可能性もゼロやあらへんのやし」

「そ、 そうだよね。 どつかで同じ部隊に配属されたら、 仲良くしようね」

「俺達から十傑に選ばれる可能性があるのは、 やつぱり神之木じゃないか？ なあ……、 神之木？」

生きてれば、 どこかの部隊で、 十傑に。 僕が動かなければ、 こいつらは死ぬ。 何一つ

叶うことなく、戦いの中で散る。同期で四年後まで生き残るのは、俺と勇上の二人だけ。いや、その勇上も『勇者』でないなら生き残れるかは分からない。俺も何かボタンを一つ掛け間違えるだけで、死ぬかも知れない。そういう世界に、明日から踏み込む。

「……あー、わりい、ちよつとうどうとしてたわ」

俺の手は、懐中時計を握りしめていた。教育課程の終盤に行われる特技別教育は、教育隊入隊時に行われる属性検査によつて判明した属性ごとに割り振られる。割り振られた先で先達に教えを請い、剣士か魔法使い——前衛か後衛のどちらかを選ぶ。俺は時属性の事は明かさず、闇属性魔法使いの道を選んだ。そして部隊実習先は東部方面隊墨田駐屯地。魔神のダンジョンから最も近い駐屯地であり、激戦区もある。墨田駐屯地に部隊実習で行くのは、これで二度目だつた。

「神之木はんは、あの墨田駐屯地やもんなん。ひよつとしたら、安眠できんのも今日が最後かも……」

「……そうだな。付き合わせて悪かつたな、神之木」

「ごめんね神之木君。僕が声を掛けちゃつたから……」

「気にすんなよ。寝付けなかつたのは俺も一緒だからさ」

本当に、人がいい奴らだ。……こいつらを死なせたくない。誰一人死なせない事は、俺にはできない。俺の手はそこまで広げられない。

一年後、多くの人々が死ぬ。魔物を喰らい進化する魔物、魔獸。ダンジョンを封鎖する事しかできなかつた人類は、その行為が魔獸を育てているとも知らず、今はつかの間の平和を謳歌している。

俺は、四年後まで待てない。一年以内にダンジョンへ挑み、魔獸を殲滅し、魔神を討伐する。俺一人の力でできる事は限られている。だから、この一年で力を示し、仲間を集め、鍛え、挑んでやる。

「……覚悟完了、つてか」

「お？ 神之木はん、気合はいつとりまんなあ。その調子で、神之木はんの名前を中部でも聞けるように頑張つてえな」

「次に入つてくる学生達に自慢させてくれよ。俺の同期に十傑がいるつてな」

「そ、それは気が早いって。いくら神之木君でもそんなすぐに十傑にはなれないよ」

「それはどうかな、とだけ言つておく」

「神之木はんが言うと、変な説得力あるなあ」

「ま、神之木は大口叩いてるぐらいで丁度いいさ。謙虚な神之木なんて想像できるか？」

「謙虚な神之木君かあ。雪じやなくて神器が降つてきそう……」

「西村、林田、お前ら憶えとけよマジで」

二度目の部隊実習

「二等戦士 神之木 拓也！ 春鏡十五年二月一日付け、東部方面隊墨田駐屯地にて部隊実習を命ぜられ、高天原教育隊より本日着隊しました！ よろしくお願ひします！」

「二等戦士 勇上 ひじり！ 春鏡十五年二月一日付け、東部方面隊墨田駐屯地にて部隊実習を命ぜられ、高天原教育隊より本日着隊しました！ よろしくお願ひします！」

俺と共に墨田駐屯地で部隊実習を行うのは勇上だ。本来ならこの墨田駐屯地、初任戦士は受け入れていらないのだが、俺と勇上は特例とされた。まあ、特例と言つても俺では二度目だが。俺達は既に十傑候補として期待されている、というよりは貴重な光属性と闇属性を育成するために最前線を経験させよう、という思惑だろう。今の十傑も、魔獸さえ現れなければ後数年は入れ替わらなかつただろうし、代替わりには早い。

駐屯地司令への着隊挨拶を済ませた俺達は、教育分隊長に連れられ会議室へ向かつた。そこで対番との面通しや駐屯地でのしつけ事項が達せられるらしい。すぐ横を歩く勇上とは、微妙な距離を取りながら歩いている。俺は勇上としつかり向き合うべきかどうか迷っていた。この勇上は、『勇者』勇上にはなりえない。なら、関わるだけ無駄ではないのか、と。しかし、『聖女』として十傑に名を連ねるだけの素質は感じる。ダン

ジョンへ挑むなら確保したい人材だ。

実に、悩ましい。勇上の横顔を眺めた。切れ長の瞳にはまっすぐ前を歩く分隊長の背中が映っている。迷いなき戦士の瞳だった。というか普通に美人なんだよなあ。礼装の上からでも分かる胸部装甲は圧巻の一言だ。それゆえに惜しい。これで勇上でなければ何も気にせず鑑賞できたのに、と。

俺は二度目の魔神戦を思い返した。勇上の『聖女』としての活躍はあまり見れなかつたが、ダンジョンの奥まで十傑全員を無事に運んだ実績は評価すべきだ。『勇者』椎堂が『勇者』勇上よりも有能だつたという可能性はあるが、神器持つてなかつたしな……。『聖女』椎堂が無能、というよりは『勇者』勇上と同じく人類を裏切つていた可能性もあるし、こつちの椎堂が『勇者』だろうが『聖女』だろうが教育隊を修業するのは来年の話だ。今は『聖女』勇上に期待する以外にないな。

「ではまず、恒例の自己紹介からさせて貰うよ」

会議室にて分隊長お手製のパワーポイントで分隊長の自己紹介と経歴、今回の部隊実習における到達目標が知らされた。このパワーポイントを前回見た時は緊張でよく中身が入つてこなかつたが、流石に二度目ともなると余裕を持つて見る事ができた。一等

陸尉、橋口 はしごち 徹、年齢は今年で四十二歳。家族構成は妻一人子一人の三人家族。子供は今年十二歳で妻ともども人工島の一つで暮らしており、現在単身赴任中で趣味はランニング。入隊理由は、魔物の脅威に怯える人々を少しでも減らすため、だそうだ。一見しただけでは柔軟な笑顔がよく似合う人格者に見えるだろうが、その本性はサイコ腹黒へいわしゆぎしやだ。普通に接する分には問題ないのだが、一度問題児や問題点を見つけた日には……。うーん、分隊長が俺が知らない人になっている可能性に期待してたところもあるし、ちょっと計画延長しようかねえ……。

今回は実習生が二人とも魔法使い候補なので、魔法使いとしての心得と運用、実戦における立ち位置や魔法を使う適切なタイミングなどを座学で学び、最後に実戦を経験する。これが今回の部隊実習の流れだ。この部隊実習で頭角を現せば墨田駐屯地にそのまま配属、前線向きではないとされれば東部方面隊の比較的前線から遠い駐屯地に配属されるだろう。

「君達に求められている事はそう多くない。教育隊で学んだ事を活かしながら生活して欲しい。では淡路士長、初任戦士達を隊舎まで案内してくれ」

「はい！」

橋口分隊長はパワー・ポイントを閉じ、後ろに控えていた戦士長に声をかけた。彼女の名前は——

「戦士長 淡路 離！ あわじ ひな

駐屯地内で分からぬ事があればまず私に聞きなひやい！」

まだキヤラが固まつていな頃の『賢者』だつた。というか気合が入りすぎて声は裏返り舌を噛んでいた。そしてその胸は、どこまでも平坦だつた。

「……」これが私達が生活する隊舎です。四階から上は女性専用区画となつてるので、神之木二士は立ち入らないように」

会議室での失敗を引きずりつつも、『賢者』……今はまだか。『賢者』改め淡路士長は俺達を隊舎まで案内してくれた。橋口分隊長が笑いをこらえながら何も言わず会議室から退室したのがメンタルに刺さつたのでろう淡路士長は、橋口分隊長退出後にしばらくしやがみ込んでいたが、一分ほどで立ち上がり、何事もなかつたかのよう振舞つた。俺と勇上は何も触れず、ただ淡路士長に案内されるまま歩いた。

「勇上二士はこのまま私に付いてきてください。女性区画の案内をします。神之木二士は、ここで少し待つていてください。兵長……海老名士長えびなという人が男性区画の案内に来ますので」

淡路士長と勇上は隊舎に備え付けられたエレベーターで女性区画へ向かつた。俺は

それを見送ると、海老名士長を探しに隊舎の居住区画へ向かつた。俺の記憶が正しければ、海老名士長は隊舎の自室で寝ているはずだ。なんせ前回の対番はその海老名士長で、橋口分隊長からの指示を忘れ、寝坊してのけるという衝撃の初対面だつたから忘れようにも忘れられない。

「確か……二階の二一二号室だったような……」

部屋の横にある名札入れには、海老名士長の名前があつた。やはり俺の記憶の通りだ。勇上が関係しない範囲なら俺の記憶もまだあてにできる。まあ、『賢者』が対番つてのは想定外だつたが、世話焼きだつたので違和感はない。というか、『破天』の性格でよく対番を任されたよな。対番という役割を通じて、成長する事でも期待されたのだろうか。あ、海老名士長は未来の『破天』である。言つてなかつたつけ？

二度目の初対面

「おや……いませんね……」

橋口教育分隊長に案内されるまま、俺と勇上は会議室へ到着した。ここが俺達実習生の仮設分隊事務室、だそうだ。右も左もよく分からないうが、勇上と一緒にならどうとでもなるだろう。自他ともに認める品行方正有能野郎だからな。しかし、会議室へ着いた途端、分隊長は不穏な言葉を呟いた。俺はなんとなく不安になり、勇上を見やる。

「…………」

うーん、無。虚無。いつも通りの人には好感を与える笑顔のままだ。こういう時のこいつは何も感じてないし考えてもない。つまり、俺も焦る必要はないだろう。動く必要があれば、勇上が先に動くだろうし。

分隊長は会議室に据え付けられた電話で、どこかへ電話をかけ始めた。

「……お疲れ様です。会議室から橋口一尉です。海老名士長はそちらに……そうですよね。いえ、分かりました。はい、はい。ありがとうございました。はい、失礼します」

分隊長は受話器を置いた後、少し考えて、再度受話器を手に取りどこかへ電話をかけた。

「……お疲れ様です。会議室から橋口一尉です。マイクを入れていただきたいのです
が、ええ、『海老名士長、面会人あり、会議室』でお願いします。はい、お願いします。
はい、はい、失礼します」

分隊長が受話器を置いた後、すぐにびんぽんぱんぽーんとチャイムが鳴った。続けて、『海老名士長、面会人あり、会議室』とマイクが入る。このマイクを入れて貰うためにどこかへ電話をしたらしい。海老名士長とやらは、この会議室にいるはずがおらず、行方不明……という事か。

うーん、急な腹痛などであればまだいいが、どこかで事故にあつてている可能性も——
「すみませんでしたーっ！　うちの海老名が申し訳ありません！　今すぐ叩き起こしてまいりますのでもう少々お待ちください……！」

突如会議室に小柄な女性が叫びながら入ってきた……と思つたら出ていった。ドップラー効果を実感したのは生まれて初めてかもしない。消防車や救急車は島になかつたし、なんだか感動するなあ。

いやいや、感動してゐる場合じやない。あの女性、一体なんの用だつたんだ？　海老名士長の居場所を知つてゐるのだろうか。それにしても、その……平たかつたなあ。しかし、それ以外は非常にレベルが高い。亞麻色の髪もアメジストみたいな紫の瞳も、少女と見まがうような体型もその童顔と相まって人形じみた美しさを感じさせる。まあ、将

来に期待かな……でも俺より推定年上であれかあ。将来……？　どこ、ここ……？

なんて無駄な思考を巡らせていると再びドップラー効果の気配を感じた。男のものと思わしき悲鳴が、徐々に高くなりながら近づいている。

「…………あああああアアアツ！」

会議室の扉が乱暴に開き、一人の男が投げ入れられた。坊主頭をそのまま伸ばしたようなぼさぼさ頭と、人のやる気すら奪いそうな無気力な雰囲気の男だった。こ、これが海老名士長、か？　というか今、凄い勢いで投げ入れられたが、誰が投げた……？　大の男一人を投げるなんて、相当な筋力が要求されるはずだが。

「おや、やつと来ましたね、海老名士長」

分隊長は海老名士長が投げ入れられた事実は全く気にならないのか、普通に海老名士長に話しかけた。

「遅刻はいけませんよ、海老名士長。『お願い』した事、忘れたわけではないでしょ？
さあ、初任戦士の前です。早く立ち上がって自己紹介をしてください」

「あつ……アアツ！」

今のは返事じやなくて、痛みに呻いただけだな。投げ入れられた衝撃で腰でもやつたのか、立ち上がる気配を見せない海老名士長だったが、先程一瞬だけ会議室に入ってきた女性が無理矢理起き上がらせた。海老名士長と一緒に入ってきたのだろうか。いや、

海老名士長を投げ入れたのはひよつとして……。

「……あー、戦士長 海老名^{えびな} 靖だ。痛みと眠気でどうにかなりそうだが、よろしく頼む」

女性に支えられながら、海老名士長は簡単に自己紹介を終えた。いや、よく見ると支えられているのではなく、逃がすまいと確保されているように見える。

「私は戦士長 淡路 雛。この男が貴方達の対番になるから、どんな無茶でも言つていわよ。こいつがなんとかするわ」

「待てよ淡路。俺は今日、明け直だぞ。あんまり無茶言うなよ」

「私だつて当直明けよ！ あんたと一緒の直だつたでしようが！」

「そう、明け直なんだから、正当な理由のない出勤をしなければいけない理由が分からない！」

何を言つているのかよく分からぬが、海老名士長が開き直つた事だけはよく分かつた。

「そうですね、今回は私の配慮が足りていませんでした。しかし、命令権者は私ではないので今回は『お願ひ』という形を取らせていただきましたが、それではやる気がでなかつた、と。よろしいでしよう。正式に教育分隊に配属されるよう、司令には私から『お願ひ』しておきますね？」

「まいりました」

俺は震えだした海老名士長を見て理解した。ああ、この分隊長に逆らうとやばいんだな、つて。

初対面の時の海老名士長の事を思い返しながら、俺は音を立てないようにドアノブをゆっくりと回し、体ごと扉を押し込んだ。部屋の寝台には、海老名士長が横になつている。仮眠しているようだ。作業服を着たままである事から、当直明けかサボりかのどちらかだろう。どっちでもありえる。前回通りなら明け直で、飯の時間まで仮眠中、なのだろう。淡路士長から『お願い』された事を忘れて……。

さて、ここで選択肢は二つある。平和的に起こすか、乱暴に起こすか。どちらも大したメリットはないので、確実性が高い方法でやりたいが……あ、良い事を思いついた。加速魔法の実験体になつて貰おう。

時属性加速魔法、バースト。対象の意識、感覚を加速させる魔法だ。体感では時の流れがゆっくりになるので、自分に使つた場合は減速魔法みたいになる。この魔法を使うと通常の会話が著しく困難になつたり、痛みなどもゆっくりと引き延ばされるので中々の苦痛だ。

これを海老名士長に三回重ねがけする。おそらく一秒が千秒ぐらいに引き延ばされているはずだ。そして指をゆっくりと海老名士長の額に近付け、全力ではないがしつかりとデコピンした。

「どおうわあ!?」

飛び起きたところで魔法を解除。一拍置いてから、

「おはようございます、海老名士長」

しつかりと挨拶した。挨拶は大事だ。

「……え、ええ？ 誰？」

海老名士長はまだ寝ぼけているようだ。

「二等戦士 神之木 拓也！ 春鏡十五年二月一日付け、東部方面隊墨田駐屯地にて部隊実習を命ぜられ、高天原教育隊より本日着隊しました！ よろしくお願ひします！」

なので眠気が消し飛ぶようにしつかりと挨拶した。

「……あー、分かつた。お前、苦手なタイプだ……」

海老名士長に隊舎内を案内して貰った。隊舎でのルール、空いている靴箱、掃除道具の場所、やり方、部屋の間取りやサボリスピットまで、ほとんどは前回と同じかどうか

の確認だつたが、サボリス・ポットは新発見だつた。海老名士長が消えたらあそこを探せばいいんだな。

意外と真面目に案内してくれる海老名士長の背中を見ながら考える。うーん、ちょっと揺さぶつてみようかな。

「海老名士長、そういえば」

「……なにさ」

「四月から十傑入りされるつて、本当ですか？」

「……淡路から聞いたのか？」

否定はしない、つて事は内示がもう来てんのかな。こっちの表情を見て、違うと判断したのか、海老名士長はごまかすように言つた

「まだ決まつた話じやない。今はまだ俺も淡路も、候補のリストに載つただけだ」
 なるほど、余裕のある時期はあらかじめ教えられるのか。二年後には人類も切羽詰まって、年度末に「君来年度から十傑ね。『自在』つて名乗つてね」とか一方的に言われるだけだつたなあ。

「ははあ、流石つすねえ。パネエつす」

「……お前、心にも思つてねーな？」

「そんなまさか。あ、俺と賭けしませんか？」

俺と海老名士長、どっちが先に十傑入りす

るか。負けた方は、勝った方の『お願い』を無理のない範囲で一つ聞く、なんてどうで
しょう?」

「……やつぱりお前、苦手なタイプだ」

「あ、海老名! 貴方、ちゃんと案内してくれたんですね! 流石に戦士長たる自覚が一

」

「淡路、飯いこーや」

隊舎の入り口で淡路士長、勇上と合流した。海老名士長は淡路士長の言葉を遮つて配食を受け取る事を提案。まあ、あんまり詳しく突っ込まれると都合が悪かろう。

「そうですね、もうそんな時間ですか……。勇上二士と神之木二士は、配食を受け取つたらしばらく部屋で休んでいていいですよ。午後になつたらベッドメイクをして、持つてきた荷物の整理。礼装は明日も着るから必要なら手入れしておいてください」

「明日も礼装を着るんですか?」

勇上の疑問に淡路士長が答える。なんだよ、結構仲良くなつてるじゃねえか。俺も勇上と仲良くしたいが、距離の詰め方がもう行方不明だ……。

「ええ、明日の課業整列で駐屯地内の隊員を集めて、初任戦士の紹介を行います。二人に

は一言、何かしら喋つていただきますので、何か考えておいてくださいね」

「はい！ 分かりました！」

「了解しました！」

「良い返事です！ では配食を受け取りに行きましょう。案内しますね」

俺達は淡路士長と海老名士長に連れられ、食堂へ向かつた。部隊で食う初めての飯
は、やつぱり美味かつた。

また俺なんかやつちやいました？

寝台のベッドメイクを終え、俺はそこに寝転がつた。荷物の整理は既に終わり、残すは寝るのみだ。だが、寝る前に考えておく事がいくつかある。

この部隊実習期間でどう動くのか。

まず、後の『破天』である海老名士長とは賭けの約束を取り付けた。賭けの内容は、どちらが先に十傑入りするか。海老名士長は何事もなければ次の四月で十傑入りするだろうから、それまでの二か月で動く。今いる十傑と十傑候補達とは隔絶した何かを見せなければ、賭けに勝つ事は難しいだろう。一ヶ月以内に何かしら結果を出さなければ四月の十傑入りには間に合わない。

海老名士長との賭けの報酬である『お願い』は、ダンジョンへの同行を頼むつもりだ。ダンジョンでの実習が不安なんですう、みたいな感じで言えば面倒くさがりつつも渋々着いてきてくれるだろう。まあ、その同行に期限や回数を提示するつもりはないので、こちらが望む限りいつまでも何回でも着いてきて貰うとしよう。魔神を倒す、その日まで。

淡路士長も四月で十傑入りする可能性が非常に高い。後の『賢者』であり、人類唯一

の四重属性魔法使いなのだから当然と言える。淡路士長にも四月までに何かしら手を打つて、協力関係を築きたい。うーん、人が良くて扱いやすくはあるが、同期やライバルに対する敵愾心も強く持っているのが淡路士長だ。なんとかなると思う。アイデンティティを確立するとのじや口調になるのはよく分からんが。

十傑入りの一番の近道は、神器だろう。現十傑も、全員が神器を持っているわけではない。神器の取得が見込めるというだけで、十傑に入る資格はある。その判断基準は魔物の討伐数であつたり、魔法の使用回数、熟練度などを総合的に加味する、らしい。十傑に選ばれた事はあつても選ぶ側になつた事がないので詳細はわかりかねる。だが、神器を持つてているのに十傑ではない、というのは引退した戦士以外にありえない。現十傑も引退が近い神器持ちが三人、神器を使いこなせるようになつてきたのが二人、神器取得までもう少しというところの五人、といつた構成だつたはずだ。

『勇者』勇上を筆頭とした十傑は、俺以外が神器持ちという歴代最高戦力だつた。『勇者』勇上の裏切りさえなければ、とは今でも思うが、真器持ちが一人いるだけで本当に魔神に勝てたのか、という疑いは未だに晴れていない。ギシンもあれから姿を見せないのだから、どこまでギシンの言葉を信じていいものか。

まあ、俺が神器持ちとして名乗りを上げるのは必須事項として、時属性の存在は伏せた方がいいはずだ。もしも停止魔法が使えるのでは、などとあられもない疑いをかけら

れると、その時点では人類の裏切り者扱いされてもおかしくはない。時計型の神器は闇属性の神器とするのが無難だろう。

後は……『賢者』の対抗心を煽るため、四重属性……いや五重属性の魔法使いとして活動しよう。複数属性を持つと魔法を発動するために必要な魔力は跳ね上がる。二重なら通常の二倍、三重なら更に二倍、四重ならそのまま二倍と、一属性増えるたびにおよそ二倍になる、らしい。その代わりに威力も倍に増える。魔力の制御に長じれば魔力を節約して使う事も可能だが、『賢者』は四重属性だったために他の多重属性持ちより文字通り倍以上の努力をしたらしい。

まあ、俺はもう神器持つてから何も考えずぶつ放して問題ない。神器を通して魔法を使うと、消費される魔力はゼロだ。つまり、本来なら七重属性持ちの俺は一般的な單一属性魔法使いの六十四倍燃費が悪く、まともに魔法の発動なんてできるわけがないレベルだが、神器を通すと全力の魔法を何度も使つても疲れない。まあ、今もしも加速魔法クイックをつい全力で使つてしまったら、という恐怖にかられてこの一か月は魔法制御力の訓練に専念したが、それも神器があつたおかげで通常の何十倍、いや何百倍ものスピードで進んだ。今なら最低出力まで絞れば普通の倍ぐらいの魔力消費で済む。

そういうえば、多重属性持ちが光属性、闇属性も使えるというのは恐らく人類で俺が初だろう。これまで『賢者』も含め、多重属性とは火、水、風、土からの複合であり、光

と闇は多重属性に混じらず、^{クラスアップ}昇格もない特殊な属性、とされてきていたはずだ。いやあ、また俺なんかやつちやいました?

時属性を除いた六重属性魔法使いと名乗る事も一瞬考えたが、やめた。万が一の可能性だが、俺が光属性も使えると知った勇上が、役割をなくして去っていく姿を想像してしまつたからだ。勇上い……『聖女』としてのお前に対する期待はウナギ登りの滝登りで天元突破だぞお……。

色々と考えたが、重要なのはタイミングだ。必要な場面で都度小出しにするか、適切な場面でどかんとぶちまけるか。慎重に慎重を重ねて公表するタイミングを計ろう。
今日はもう遅いし、寝よう。

「二等戦士 神之木 拓也！ 春鏡十五年二月一日付け、東部方面隊墨田駐屯地にて部隊実習を命ぜられ、高天原教育隊より過日着隊しました！ よろしくお願ひします！」
課業整列で駐屯地内のほとんどの隊員が整列する中、俺達の紹介が行われた。ここまではよかつた。

「では神之木二士、簡単な自己紹介と部隊実習の抱負をお願いしますね」
壇上で橋口分隊長にマイクを手渡され、ふと整列している隊員達を見た。皆こちらを

見ている。こちらの一挙手一投足を見ている。足元がゆがむ感覚。緊張、している。何を言おうとしていたのか頭から飛ぶ。

「…………」

あ、これはまずい。何かを言わなければならない。橋口分隊長も勇士もこちらを見ている。課業整列の音響を担当している隊員が、スピーカーかマイクの不具合かと気にしている。何か、何か言わねば。

「あー……」

と、とりあえず自己紹介からだ。

「二等戦士 神之木 拓也」

名前は言えた。後は年齢、出身地、属性、趣味か。

「歳は今年で十七で、出身地は人工島ノア。属性は七重属性で、趣味は——」「あれ、俺今なんて言つた？」

「神之木君、今なんて？」

橋口分隊長から横やりが入った。まだごまかせる。年齢の十七に引っ張られて囁んでしまつた、で行こう。

「すみません、囁みました。属性は五重属性で趣味は神器の時計磨きです。よろしくお願いします！」

うむ、これなら問題ない。完璧な自己紹介だ。うん、ここで言うべき事だつたか怪しい発言があつた事以外は完璧だろう。もういいや。

「私は！」

あ、声を張りすぎてマイクがハウリングしてしまつた。一度、大きく深呼吸してから続ける。

「……魔神討伐のため、一年以内にダンジョンへ挑みます！」

なんでこうなつたか分からんが、言いたい事は言えたから、ヨシツ！

完璧な計画

俺は壇上で達成感に包まれていた。本来の計画ならここで無難に挨拶をこなし、機をうかがうつもりだつたが少し、ほんの少し前倒しになつた。言い換えれば、目標達成が近くなつた。うん、何も問題ないな！

墨田駐屯地での課業整列は、陸、海、空、魔の四自がそれぞれ整然と並ぶが、今は俺の自己紹介で一部列が乱れ、ざわめいている。壇上に立つ俺と橋口分隊長に対して、今のは発言は何事か、という視線を向けている者も多い。まあ、何事かと言われてもただの事実としか言いようがない。一部過少に言つたが、過大に言うよりかは可愛いものだろう。

「……えー、以上で初任戦士の紹介を終わる」

橋口分隊長は場を収めるため、紹介を無理矢理終わらせた。俺は橋口分隊長に向き直り、敬礼をして、壇上を降り、すでに紹介を終えて壇上の横で待機していた勇上の横に並ぶ。後は勇上の号令通りに動き、司令に敬礼をして魔自の隊列の後ろに戻れば今日の課業整列は終了だ。……？ 司令に敬礼する時、何か司令が呟いたような気がする。気のせいいか……？

「では神之木二士、面談を、しよう」

課業整列を終え、仮設分隊事務室の会議室に戻った俺と勇上は、休む間もなく橋口分隊長に捕まつた。……いや、捕まつたのは俺だけか。橋口分隊長の圧が、強い。

「勇上二士とも、この後面談を行う。神之木二士との面談が終わるまで、ここで待つてくれ。では神之木二士、ついてきてくれ」

訂正、一応勇上も捕まつていたらしい。勇上は不安そうにこちらを見やるが、俺にはどうすることもできない。許してくれ勇上……いや別に許さなくてもいいけど。

橋口分隊長に連れられ会議室の外へ。少し歩き、司令公室の前で止まつた。司令公室は俺と勇上が司令に着隊の挨拶を行つた場所だ。客人用の良い椅子が置いてあつたはずだが、まさかここで行うのだろうか。

橋口分隊長は躊躇なく司令公室に入り、こちらに手招きをしている。司令公室を面談に使うなんて、まぎれもなくVIP待遇だ。俺が知つている限り、幹部に対する面談でも司令公室が使われる事は少なかつたはずだ。ましてや二等戦士なんて、密室という条件さえクリアすれば良いというスタンスだつた。うーん、これは怒られるわけではなさそうだな。

橋口分隊長は先に座り、卓を挟んで向かいにある椅子に座るよう言つた。さあ、ここから口八丁手八丁で、うまいことあれやこれやしないといけない。人はそれを、ノープランと呼ぶ。

橋口分隊長が聞き取り用紙を出し、面談が始まった。

「では神之木二士、まずは……先程の自己紹介はどういう事かな？」

「えーっと……自分なりに客観的事実を述べただけです。属性のところは、年齢を言った後だつたので釣られて噛みました」

橋口分隊長は、俺が喋つた内容を素早く手元の用紙に記入していく。おそらくは司令、副長への報告に用いられるのだろう。

「なるほど。……では君は、五つの魔法属性を持ち、なおかつ神器も持つてていると言ふんだね？」

「そうです。闇、火、水、風、土の五属性が使えます。神器はこの……懐中時計型の神器で、闇属性のものです」

指折り使える属性を数えた後、指を広げ、手のひらに何もない事を見せてから、神器を手のひらの上に出現させた。神器の特徴の一つとして、慣れれば持ち運ぶ必要がない、というのがある。神様とのつながりを意識すると、自然とその手に収まるようになるのだ。一部の剣士は戦闘中にもこれを行い、神器を投擲武器として扱う馬鹿もいる。

元同僚の『百獸』つていう十傑なんですけどね……。

「——ッ!? そ、の……神器は、打撃武器として使えるのかな?」

おお、流石の橋口分隊長も非武器型の神器には動搖が隠せないか。まあ、無理もない。俺も時属性の神様に手渡された時、神器とは思ってなかつた。神器とは神が人に与える奇跡。敵を打ち払う力の象徴。『勇者』勇上が持つていた剣型が圧倒的に多く、次点で『聖女』椎堂や『賢者』淡路が持つていた杖型が多い。まあ、神器の形が剣士、魔法使いを区別するわけではのでややこしくもある。剣型と言つても実用性のない形をしたものや、杖型と言つても打撃武器にしか見えないもの。これまで確認された神器の共通点は、武器の形を取つていてる事ぐらいだ。

「これで殴れば痛いとは思いますが、魔物相手に使うには心許ないですね……」

手のひらに伝わってくる、金属のひんやりとした感触。力を込めて握つてもきしんだりしないことから耐久力はありそうだが、攻撃力は腕力次第……というかただのパンチだ。

橋口分隊長は俺の言葉を聞いて空を仰いでいる。初の闇属性神器が非武器型の、これまでの常識が通用しない神器で、神器かどうかすら怪しいがその特性は神器のそれ。どう報告すべきか悩んでいるようだ。

「そう、か。……すまない。今、私は冷静さを欠こうとしている。面談はここで中断とさ

せてくれないか。君という貴重な戦力を、今後どう扱うか。こちらである程度目途を立ててから再開したいと思う」

「……分かりました」

「会議室に、分隊事務室に戻つてくれていい。……ああ、勇上二士に、この司令公室まで来るよう伝えて貰つていいかな?」

「了解しました。戻り次第勇上に伝えます」

「お願ひするよ」

仮設分隊事務室に戻つた俺は、勇上に司令公室で橋口分隊長が待つてていることを伝え、軽く道順を教えて送り出した。少し恨みがましく見られた気がするが気のせいだろう。分隊長との面談なんていつかするもんだし、多少早まつただけだからな。

さて、これで勇上の面談が終わるまでは手すきになつた。橋口分隊長の言う目途とやらも、今日中にどうこうなることはなかろう。俺は部屋に一人きりなのを確認してから、大きくため息を吐いた。

やつちやつた。やつちやつたよ。大いにやらかしたよ。課業整列でもそだけど面談でもやつてるよ。なーにが自分なりに客観的事実を述べただけです、だつてよ。ごま

かそうとしてより痛い方向に向かつてゐるじやねえか。

「うぐ……腹が痛くなつてきた気がする……」

トイレ行こうかな……いや、行つても無駄か。少しは自分をほめてストレスを軽減しよう。えーと、なんかほめるところあつたかな……。あ、あれだ。属性を光以外の五属性だと言つたのは結構良かつたはずだ。光属性も使えるという事にしてしまうと、光と闇が合わさり最強に見えるが勇上のアイデンティティである光属性の役割を俺が奪つてしまい、『聖女』勇上を仲間にすることとか勇上が『聖女』を目指すかどうかすら怪しくなるところだつた。

闇属性の神器持ち、というだけで人類史上初の快挙であり十傑入りも狙えたが、複数属性持ち、という事にしたのは『賢者』に対する煽りだ。『賢者』なら、淡路士長ならこれを挑戦と捉えて勝手に動いて勝手に自爆してくれることだろう。そうなれば仲間に引き込むのは簡単だ。落ち込んだところをなだめすかして神器を獲得する手助けを行えば、後は親カルガモの後ろについていく子カルガモのように何も言わずともついてきてくれるようになるだろう。難だけに。

我ながら完璧な計画だ……ほれぼれする。教育隊で考えた計画は忘れて、この完璧な計画で行こう。バーフェクトプランちなみに、教育隊で考えた計画とは、はじめ強く当たつて後は流れで、高度な柔軟性を維持したまま臨機応変に対応するという非常に画期的で有能な計

画だ。俺の頭脳が火を噴いたぜ。

「神之木二士いますか!?」

今後の計画を練り終わったところで淡路士長の声が仮設分隊事務室に響いた。部屋の入口には対番である淡路士長と、兵長の海老名士長の姿があった。淡路士長が来るのは予想通りだが、海老名士長が来るのは意外だ。面倒ごとを嫌う海老名士長は、他人に興味を持たないよう努めている印象だったのだが。

「どうされましたか、淡路士長」

「どうされましたか、じやないわよ！　あの自己紹介、どういう事!?　ど、どこまで本当なの!？」

怒りと焦りと不安と期待が入り混じつた良い顔ですなあ、淡路士長。早速完璧な計画パーソナルエクスプロンをの締めに入るべきか考えたが、まだ焦らした方が効果も高まろう。

今は煙に巻かせていただこうか。

「どこまで、といふと……五属性使える事も、神器を磨くのが趣味なのも本當ですよ」

ほら、と言つて手のひらに懐中時計型の神器を出す。淡路士長は先程まで何もなかつた手のひらに懐中時計が現れたのを見て、神器だと認識して腰が抜けたようにへたり込んだ。

「そ、そんなあ……人類史上唯一の四重属性として、十傑入りする私の完璧な計画パーソナルエクスプロンがあ

……」

……ひょつとして、俺の思考回路つて——これ以上いけない。

「神之木、その神器つて……打撃武器じゃねーだろ」

「はい。これは武器としては使えない神器になります。珍しいみたいですね、こういう神器」

「珍しい、つて……そりや珍しいけどよ」

海老名士長は、違うそうじやない、という表情だ。神器を武器として使えないのは大きなデメリットだが、手のひらサイズの神器というのは大きなメリットだ。まあ、どつちもどつちだな。俺が剣士なら自分の神器が武器型じゃなかつたらシヨツクだろうなあ。剣道が得意なのに打撃武器が出たりしてもシヨツクだろう。

うーん、なんとか煙に巻けたかな——と思つた瞬間、突如後ろから肩を組まれた。何事、というか何やつ!?

「ツれねエなア、神之木一士イ。おじさんにイ、もちつと話聞かせてくれやア」

この顔、声、喋り方の癖……全てが一致する人物は俺が知る限り一人だけ。墨田駐屯地司令 一等戦佐 鶩尾 空わしおそら。魔臓を持たぬ身でありながら、魔物との戦いに身を投じた現代の英雄。

いつからいたんだこのおっさん……。